

## ●浜の話題

- 6月1日、県立海洋科学高校による今年度のアワビ種苗放流の説明会が、横須賀市長井にある同校実習場において、地元の長井町漁協潜水部会会員を対象として行われました。県水産技術センター栽培推進部および水産研究・教育機構中央水産研究所の職員も参加し、県水産技術センターからは「今年は城ヶ島の刺網で真冬の2月にアイゴが多く漁獲されたので今後の動向に要注意」との話をして、また、中央水研からは「長井地先の浅場ではアラメ・カジメが復活傾向にある」との話がありました。（荻野）
- 6月1日、平塚漁協所属の磯崎指導漁業士（川長三晃丸）の定置網に200kgを超える大きなサメが入りました。サメ料理専門家の田中氏が確認したところ、このサメは「オオワニザメ」という種類で、この海域で見かけるのは大変珍しいと話していました。（櫻井）



網にかかったオオワニザメ

- 6月2日、小坪漁協は逗子市小坪漁港岸壁で「漁組船上市場」を開催しました。このイベントは昨年からはじめた地魚直売イベントで、当日は約500人の人が集まりました。岸壁に係留した漁船の上で活アオリイカやサザエ等の地魚が販売され、好評だったそうです。（荻野）
- 6月7日、横須賀市大楠漁協と三和漁協城ヶ島支所は、3月から始めたウニ養殖試験で飼育中のムラサキウニを測定しました。餌のキャベツを盛んに食べたウニは、可食部の生殖腺が発達し、その重量が体重の10%を超える個体も見られるようになりました。食べ頃を判断するため、両漁協とも今後も定期的に測定を行っていく予定です。（相澤）



ムラサキウニの生殖腺

- 6月11日、県水産技術センターは（国研）水産研究・教育機構増養殖研究所との共同研究の一環と

して、横須賀市の小田和湾松越川河口に同研究所伊豆庁舎で生産された全長約6cmのトラフグ稚魚約50,000尾を放流しました。当日は、長井町漁協所属のトラフグはえ縄漁業者14名で構成される「福会」のメンバーも立会いました。放流には、稚魚が沖合に分散せず餌生物の多いごく浅い砂浜やアマモ場に留まるよう、仕切り網を設置して行いました。放流後は同センターの研究者から、トラフグの生態等について説明を行いました。（荻野）



トラフグ種苗放流の様子

○ 6月11および12日、神奈川県しらす船曳網漁業連絡協議会の会員16名が、三重県へ視察に行きました。鳥羽市の漁業用FRP製竿の製作会社を訪れ、一本釣り用の竿ではオーダーメイドで硬さを調整したものが800種類もあることや、その他曳き縄竿、シジミ竿、採介藻の竿を製作していることなどの説明を受けました。参加者は自分の好みに合った硬さの竿の注文ができないかなどを質問するなど、知見を広げられただけでなく、会員間の親睦をさらに深める良い機会となりました。（櫻井）



一本釣り用FRP製竿の説明を受ける協議会会員

○ 6月12日、小田原市漁協青年部は、ウニ蓄養事業で育てたウニの試食会を開催しました。試食会には、小田原魚市場の買受人、飲食店関係者、マスコミ関係者、小田原市議会議員など20名以上が参加し、蓄養ウニと当日採捕した天然ウニとの味比べを行いました。試食した多くの参加者は「蓄養ウニの方が甘味があり美味しい」と評価していました。青年部では7月上旬の出荷を目指し、取り組みを継続していきます。（高村）



試食会の様子

試食会で提供した蓄養ウニ

- 6月13日と14日、三和漁協城ヶ島支所、同支所所属漁業者、および城ヶ島ダイビングセンターで構成される「城ヶ島地域藻場保全活動組織」は、藻場を減らす一因となっている植食性魚アイゴの除去活動を実施しました。城ヶ島地先の漁場に刺網を一齐に仕掛けたところ、尾叉長30cm前後のアイゴが2日間で計221尾、111kg捕獲されました。この活動は平成25年から継続して実施しており、対象海域ではカジメの回復も確認されています。同組織では今後もひきつづき磯焼け対策の活動に取り組んでいく予定です。（加藤）



刺網を仕掛ける漁業者



捕獲されたアイゴ

- 6月14日、小田原市漁協刺網部会は、小田原漁港蓄養水面でガンガゼ駆除を実施しました。当日は刺網部会員10名のほか、刺網部会が依頼した地元ダイビングショップのインストラクター4名、県水産技術センター相模湾試験場職員4名の計18名が参加して作業を行いました。ガンガゼは大量に増殖すると大規模な磯焼けを引き起こすことから、同部会では昨年からのガンガゼの捕獲・駆除を行っており、今後も継続して活動する予定です。（高村）



刺網部会長からの挨拶



捕獲したガンガゼ